《資料紹介》

三次市青河町陽日南古墳群の円筒埴輪

村田　晋

1　はじめに
2　既出情報と先行研究
3　資料の紹介
4　埴輪からみた陽日南古墳群の造営時期
5　おわりに

【要約】

広島県立歴史民俗資料館が所蔵する陽日南古墳群の円筒埴輪を図面・写真とともに紹介し，備後北部地域の円筒埴輪との比較検討から，古墳群の造営時期を古墳時代中期後半に位置づけた。

1　はじめに

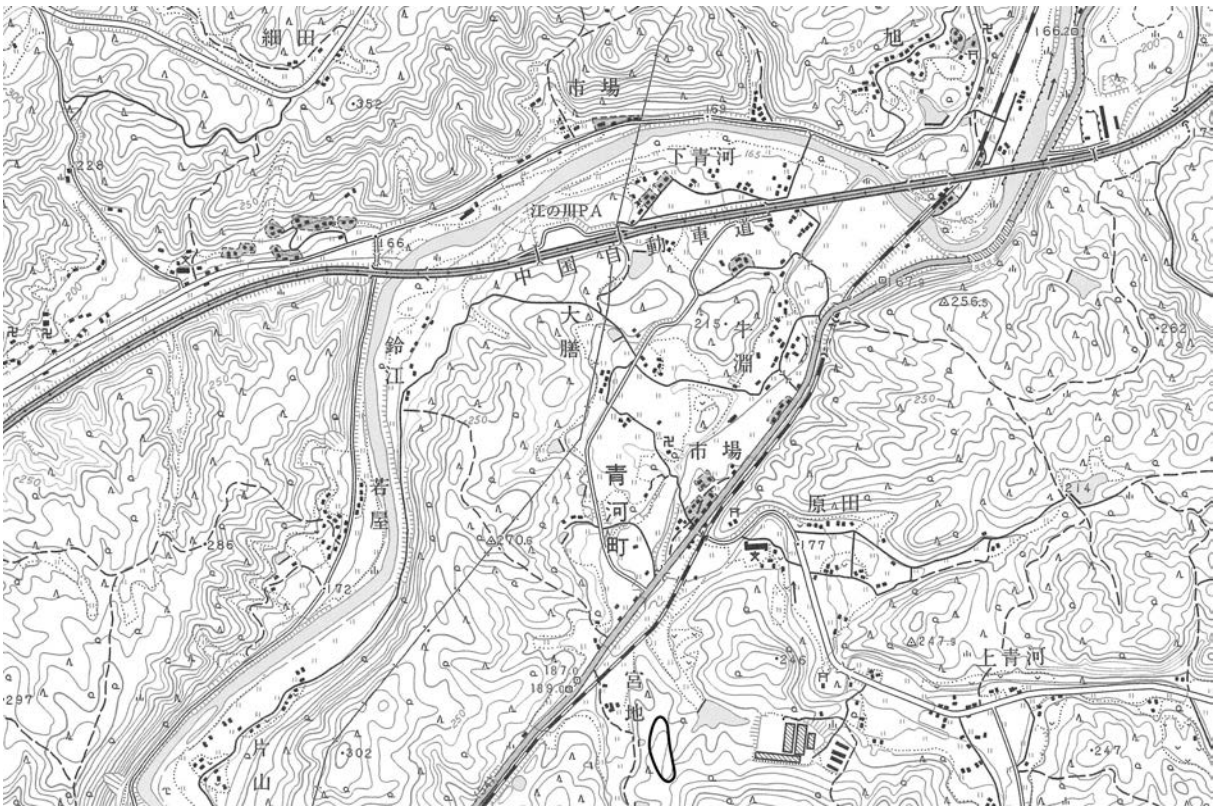
本稿では広島県立歴史民俗資料館が所蔵する陽日南古墳群出土の円筒埴輪を紹介する。陽日南古墳群は青河町内においては大型となる30 m超の古墳を含む古墳群[1]として知られるが，行政や大学による組織的な発掘調査は未実施であり，古墳群の詳細を知りうる体系的記録はない。埴輪の存在に関する記述もいくつかの文献に散見されるが，いずれも図面や写真などの資料の提示を伴うものではなく，その情報をもって行う古墳群の時期比定には客観性の面で限界があった。

本稿で紹介する資料も詳細な出土記録を伴うものではないが，古墳群で出土したとされる他の資料の所在が明確でない今，古墳群の評価を行う一つの基準として，まずは公表すること自体にそれなりの意味があると考える。

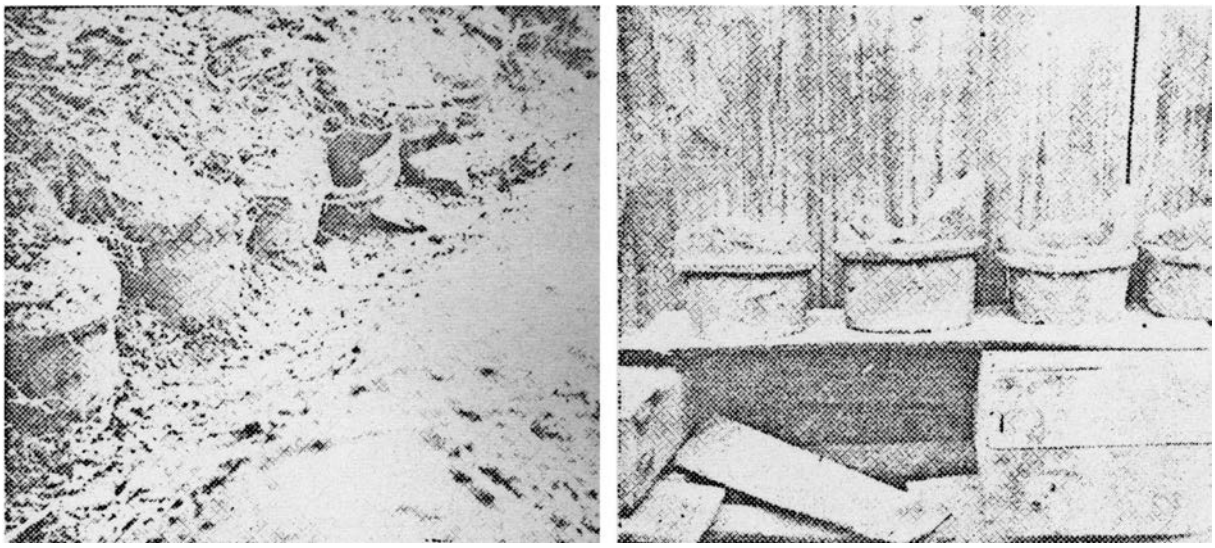
2　既出情報と先行研究

古墳群に関する既出情報と先行研究を確認しておきたい。陽日南古墳群は広島県三次市青河町に所在する。北流する一級河川江の川からみて東へ約１㎞内陸部に入った，現在JR芸備線が走る低地を西に望む丘陵上に築かれた古墳群である（第１図）[2]。

古墳群の初出文献である『広島県双三郡・三次市史料総覧』（双三郡・三次市史刊行会1956，48･49頁）には，陽日南第１号古墳が後円部径28 m，前方部長９ｍの帆立貝形前方後円墳であり，周溝・葺石・段築・埴輪を伴うこと，そして，この時からさらに30年前に発掘され，後円部頂に発掘坑が残っていると記されている。また，第２号古墳が後円部径12.5 m，前方部長4.45 ｍの前方後円墳であり，葺石･埴輪を伴うこと，第３号古墳が墳丘の削平された規模不明の円墳であり，平面規模２×１ｍの「小口積石棺？」を伴うことが記されている。あわせて，巻頭図版（第２図）には「酒河村青河，陽日向（向は南の誤植か：筆者注）古墳　前方後円墳下段と中段に二列に並



第１図　陽日南古墳群の位置（1/25,000）



第２図　『広島県双三郡・三次市史料総覧』掲載図版
左：陽日南古墳円筒埴輪出土状況，右：同保管状況

べられた円筒埴輪」「全上を取り出したもの　装飾を兼ね土止めにしたもので赤茶色の素焼（十日市滝谷章氏所蔵)」というキャプションとともに，円筒埴輪列検出状況と保管状況の白黒写真が掲載されており（双三郡・三次市史刊行会 1956，４頁)，おおむね最下段突帯以下が残った円筒埴輪を４点以上確認することができる。キャプションには第何号古墳であるかまでは記されていないが，段築をもつ前方後円墳という情報から，同書における陽日南第１号古墳を指していると考えられる。

キャプション内には「滝谷章氏所蔵」と記されているが，本稿で紹介する埴輪も以前同氏によっ

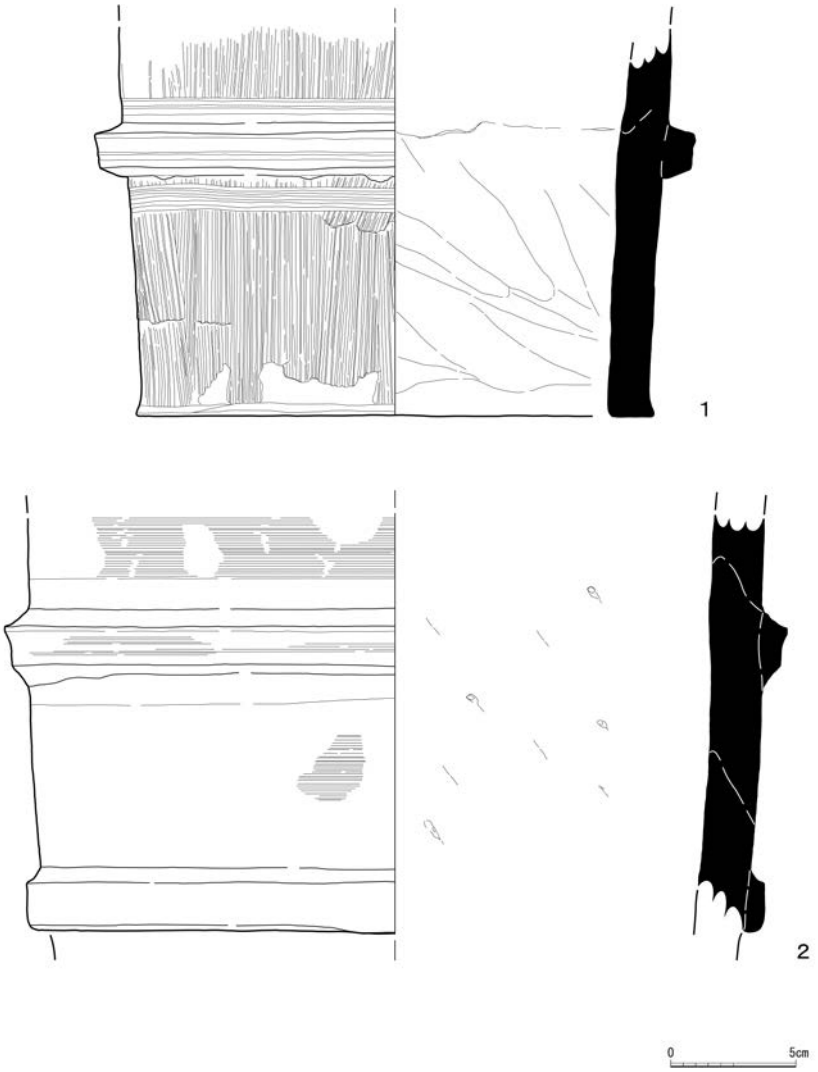
て保管されていたものである。古墳群内のどの古墳に伴うものかについての注記や記録こそないが，上記文献の内容から推定すると，後述の埴輪１は図版掲載された資料のうちの一つか，もしくは同じタイミングで出土した資料である可能性が高い。

築造時期については，まず桑田俊明は『前方後円墳集成　中国・四国編』において，根拠は示していないが，編年表のなかで陽日南第１号古墳を集成７～８期の時期に位置づけている（桑田 1991a)。なお,『広島県双三郡・三次市史料総覧』で「帆立貝式前方後円」とされていた墳形は，ここでは 33 ｍの円墳とされている。このほか，同第２号古墳が墳長 17 ｍの葺石を伴う可能性がある帆立貝形古墳として，簡単な踏査情報が記載されている（桑田 1991b)。また，古瀬清秀は備後北部地域の古墳築造状況について地区別に触れるなかで，青河・上川立地区最大級の古墳の一つに陽日南第１号古墳を挙げ，埴輪・葺石・竪穴式石槨を備えていること，また，三次盆地における埴輪の普及がおおむね中期後半以降であることから，古墳を中期後半頃の築造と推測している（古瀬 1992)。先学が想定する築造時期には大きなずれはないようである。以下，資料をもとに検討していきたい。

３　資料の紹介

本稿で紹介するのは円筒埴輪２点である。１は底部から最下段突帯付近にかけて全周が残存している（第３図１，図版第１)。陽日南第１号古墳出土と推定できる資料である。完形としてではなく，残りの良い部分を基準に反転図化を行った。基底部は若干歪み楕円形を呈し，底径 18.0 ～ 20.4 ㎝である。突帯は断面が台形状を呈し，幅約 2.0㎝，高さ 1.3 ㎝程である。突帯の外面と上面側は横ナデによって凹線状に凹むが，下面側は横ナデがなく，突帯に接しないやや離れた位置に１周する横ハケが施されている。突帯と底部の周辺を除き，外面は垂直に近い角度で施された１次調整[3]の縦ハケによって調整される。縦ハケは突帯よりも上方から下方に向かって連続する，長いストロークで施されているが，底部付近には外面ハケが及ばず無調整となっている部分が確認できる（図版第１上・中段)。内面調整は基底部側で強いナデが，斜め下方に向かって施されている（図版第１下段左)。底部は内面を中心にナデと指頭圧によって調整されるが，厚さは均一でない。一部には粘土紐の継ぎ目が明瞭に観察でき（図版第１下段右)，自重で基底部が潰れたことや，それを整える意味での基底部調整の痕は認められない。このような内外面調整の方向や基底部の状態から製作者の姿勢を考慮すると，少なくとも残存する部位については，粘土の積み上げから器面調整まで，埴輪を倒立させた状態で行われたことが推定できる[4]。底面の一部には，ナデ調整の後についた，植物圧痕と推定できる線状の凹みが観察できる。内面の突帯付近のレベルに粘土の継ぎ目が観察できるが，粘土が器壁内側の上方に向かって食い込むような状態からみて，内傾接合を行っていることが推定できる。内外，断面ともにぶい黄橙色（10YR7/4）を呈し，良く焼けている。黒斑は認められない。胎土には径１～３㎜程の石英・長石・黒色鉱物・赤色土粒を多く含んでいる。

２は体部片で２条の突帯が残存している（第３図２，図版第２)。突帯部分を除く体部復元径は最大 29 ㎝程となり，器壁は２㎝前後とやや厚い。上位突帯は断面台形を呈し，幅 2.5 ～ 3.0 ㎝，高さ 1.0 ～ 0.7㎝ 程で下面側がやや低くなる。強い横ナデによって外面中央部が凹んでいる。下



第３図　陽日南古墳群　円筒埴輪（1/3）

位突帯は幅 2.3 ㎝，高さ 0.6 ㎝程で，上位突帯と比べて低く，下面側が下垂した断面形である。いずれの突帯も上面側は比較的入念な横ナデ調整によって，水平に近い角度で貼り付けられているが，下面側の貼り付けはやや粗雑であり，上位突帯では突帯と器壁の間隙がみられる。外面にはストロークの長い横ハケ（Ｂ種もしくはＣ種横ハケ：川西 1978）が２次調整として観察できる。内面は風化が著しいが，砂粒の動きからみて斜め方向の粗いナデかヘラケズリによる調整が施されていることが推定できる。断面の割れ口から外傾接合が行われていることがわかる。上位突帯周辺は器壁が若干内側に押し込まれたような状態である一方で，下位突帯を貼付けた部分の器壁は凹んでおらず，上位突帯と下位突帯で貼り付け時の器面の乾燥状態が異なることが想定できる。内外，断面ともにぶい黄橙色（10YR7/4）を呈し，良く焼けている。黒斑は認められない。胎土は粗く，径１～５㎜程の石英・長石・黒色鉱物を多く含んでいる。

４　埴輪からみた陽日南古墳群の造営時期

まず，埴輪１は無黒斑で外面２次調整横ハケの省略が著しいことから，第Ⅴ群円筒埴輪（川西

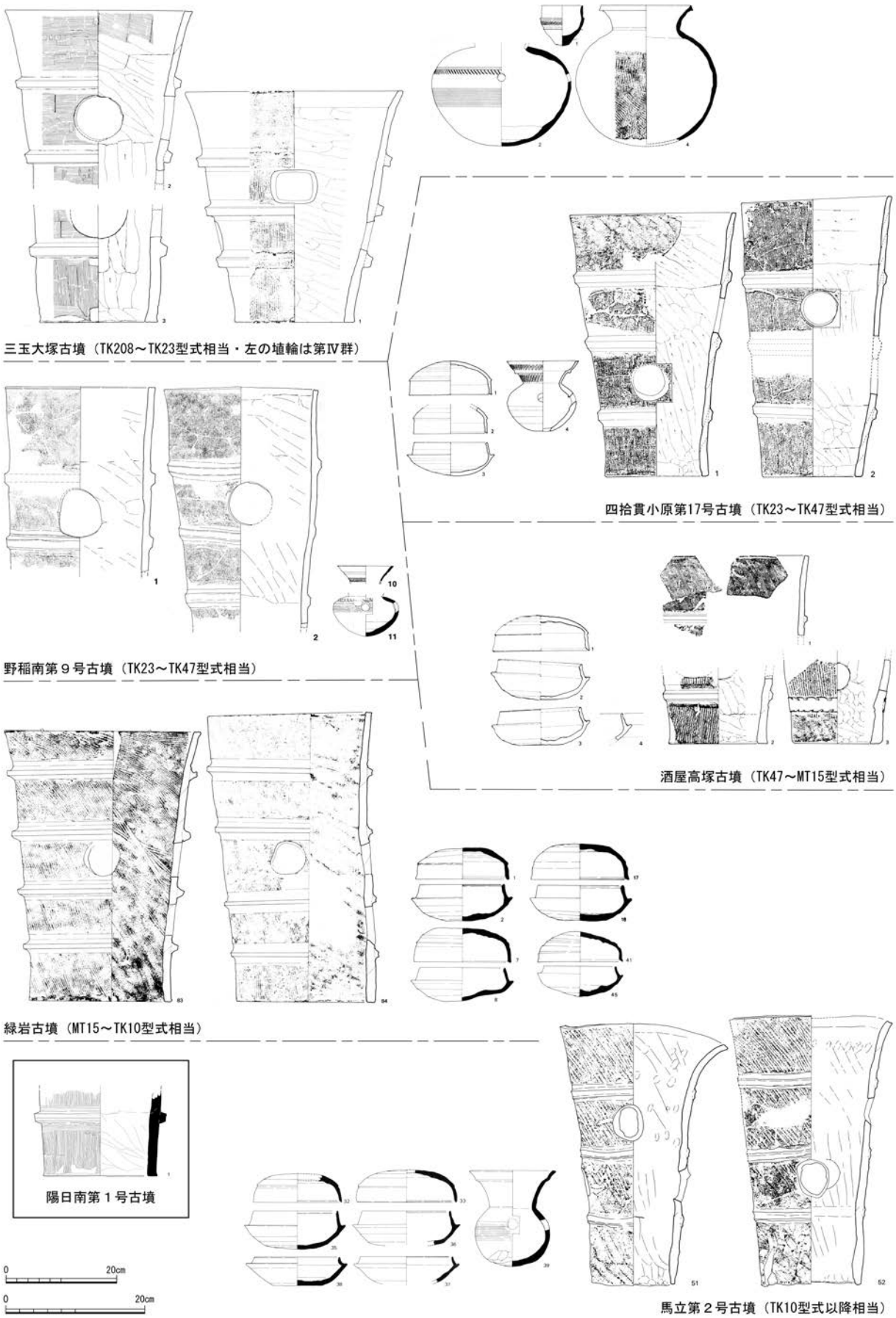
1978）と考えることができる。第Ⅴ群円筒埴輪はおおむね中期末頃から後期にかけて長い期間製作されたため，時期を絞り込むには第Ⅴ群円筒埴輪のなかで特徴を比較する必要がある。そこで，備後北部地域における第Ⅴ群円筒埴輪の変遷を，伴出した[5]須恵器の特徴に基づいて整理した上で検討を行う。比較対象とするのは三次市三玉大塚古墳（桑原ほか 1983），四拾貫小原第 17 号古墳（向田編 1980），野稲南第９号古墳（菟原編 2004），酒屋高塚古墳（青山編 1983，妹尾 1992），緑岩古墳（桑田編 1983），および庄原市馬立第２号古墳（岩井編 1998）の６古墳であり，出土円筒埴輪を須恵器の時期に沿って並べたものが第４図である。須恵器の型式については，各古墳の報告書や先行研究（田辺 1981，中村 1981・2001，妹尾 1992，山田邦 2011 など）を参考に筆者が判断した。

提示した第Ⅴ群円筒埴輪の特徴を概観すると，完形品は少ないが段構成は３条４段で，突帯はおおむね TK23 型式相当期以降，幅に対して突出の弱い台形状を呈するものが多くなる。器面調整は外面が１次調整縦ハケもしくは斜めハケ，内面は粗いナデ（指ケズリ）による。製作技術の系統差を考慮する必要があるが，おおむね MT15 型式相当期以降の時期的変化として，口縁部を除く体部の縦ハケ調整が垂直に近い角度から斜めになり，彫りが深く粗くなるほか，全体が大きく歪んだ個体が現れる。上述した大枠における例外を指摘すれば，緑岩古墳では段構成が４条５段，突帯の突出は強く，内面も斜めハケによる調整がみられる。また，三玉大塚古墳[6]と酒屋高塚古墳では最下段突帯に押圧技法に類する調整が施されたものが含まれるほか，酒屋高塚古墳と馬立第２号古墳では基底部をハケ以外の方法で再調整されている。三玉大塚古墳のものは当該時期としてはハケの彫りが深く粗い。

ここで改めて陽日南第１号古墳の埴輪１をみると，突帯の突出が強い，外面縦ハケが垂直で彫りが深く粗い，内面を強いナデで調整されるなどの点から，三玉大塚古墳（TK208 ～ TK23 型式相当）の出土例と特徴が似ており，近い製作時期が想定できる。島崎東は中国地方の第Ⅴ群円筒埴輪では全面において２次調整が省略されるが，吉備地方では古相のもの（陶邑 TK23･TK47 型式相当）にある程度２次調整横ハケが残存することを指摘している（島崎 1992）。三玉大塚古墳の出土例は，実見したところ口縁部と突帯の周辺に部分的な横ハケが施されており，陽日南第１号古墳の埴輪１についても，最下段突帯の下方に１周する横ハケが観察でき，いずれも島崎の言う第Ⅴ群古相に比定しうる特徴をもっている[7]。

続いて，埴輪２は破片ながら無黒斑で均質に焼けており窖窯焼成が想定されること，外面２次調整横ハケを施すことなどから，第Ⅳ群円筒埴輪に分類できる。上位突帯の形状や器壁の厚さなどを基にすると，近隣では三次市三玉大塚古墳の埴輪と似ているため，埴輪２も近い製作時期を想定できそうである。

問題は，上述のように『広島県双三郡・三次市史料総覧』の記述や掲載図版（第２図）から埴輪１については陽日南第１号古墳に伴うことが推定できるが，埴輪２の体部片は掲載がなく，埴輪の出土が記録されている第１号，第２号のどちらの古墳に伴うのかわからないことである。型式学的特徴は埴輪２の方が古相といえるが，三玉大塚古墳（TK208 ～ TK23 型式相当）では多数の第Ⅳ群円筒埴輪と少数の第Ⅴ群円筒埴輪が共伴するため，陽日南第１号古墳において埴輪２点が伴っていてもおかしくはない。埴輪１と埴輪２が共伴するか否かという問題は残るが，ともかく古墳群全体としては，先学による年代的位置づけ（桑田 1991a，古瀬 1992）と同じ集成７～８期，



第４図　備後北部地域の第Ⅴ群円筒埴輪（1/10）と伴出須恵器（1/8）

中期後半の造営時期が想定できる。

５　おわりに

詳細が不明な陽日南古墳群について，出土した円筒埴輪の図面・写真を紹介し，物的証拠をもとに先学による古墳の年代的位置づけを追認した。中期古墳が盛んに築造された三次盆地周辺において，陽日南古墳群が属する可愛川流域の様相はあまりわかっていない。調査・研究の進展を期待する。

三玉大塚古墳出土埴輪の調査にあたって，三次市教育委員会の友廣美和氏，三次市吉舎歴史民俗資料館の青木晃子氏にお世話になった。末筆ながら記して深謝いたします。

注

(1) 後藤研一によれば,陽日南第１号古墳は三次地方で初めて確認された(帆立貝形)前方後円墳でもあるらしい(後藤 2018)。

(2)Web 上で公開中の広島県遺跡地図（https://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/bunkazai/bunkazai-map-map.html：2020 年３月現在）では，陽日南古墳群のデータが既出文献上のそれと全く異なっている。一方，同じ青河町内にある宮地南古墳，宮地第１・２号古墳のデータを参照すると，既出文献における陽日南古墳群のデータと古墳数・規模・外表施設など諸情報が近似している。分布調査や遺跡地図作成の際に番号・名称変更が行われた可能性がある。遺跡地図と既出文献における古墳名称の対応関係は,陽日南第１号古墳→宮地南古墳（地図 91 三次附図５-595），陽日南第２号古墳→宮地第２号古墳（地図 91 三次附図５-594），陽日南第３号古墳→宮地第１号古墳（地図 91 三次附図５-593）と推定できる。本稿では記録上の連続性を重視し，また混乱を避けるために「陽日南古墳群」の名称を踏襲するが，公開中の遺跡地図における陽日南古墳群（地図 91 三次 -586 ～ 591）とは別の古墳群であることをここで強調しておく。

(3) 突帯貼り付け前の外面調整を１次調整，突帯貼り付け後の外面調整を２次調整と呼び分ける（川西 1978)。

(4) 倒立状態で粘土積み上げと器面調整を行ったと推定できる円筒埴輪は，本稿の埴輪１以外の三次盆地の第Ⅴ群円筒埴輪（川西 1978）のなかにも確認できる。なお検討を要するが，緑岩古墳，四拾貫小原第 17 号古墳，酒屋高塚古墳などの資料にその可能性がある。倒立状態を基本として円筒埴輪を製作する「倒立成形技法」が想定できる資料については，いずれ別稿で論じたい。

(5) 同一遺構の一括資料という厳密な意味合いではなく，同一古墳という意味合いで表現を用いる。

(6) 図示していないが，三玉大塚古墳の未発表資料のなかに押圧技法に類する調整を行う個体を少数確認している。

(7) ２次調整横ハケの残存を吉備における特徴すなわち地域色とできるのならば，三玉大塚古墳と陽日南第１号古墳の埴輪１にもその影響を指摘できることになり，三玉大塚古墳の円筒埴輪に認められる類押圧技法と合わせてきわめて示唆的である。江の川流域に属し，本来地理的に山陰地方とつながりの強い三次盆地が，どのような過程を経て吉備に属することになったのかという問題と関わるからである（村田 2018)。

挿図・図版出典

第１図：国土地理院地図に加筆。第２図：双三郡・三次市史刊行会 1956 より引用。第３図：筆者作成。第４図：桑原ほか 1983・向田編 1980・莵原編 2004・妹尾 1992・桑田編 1983・岩井編 1998 より一部改変，筆者作成。図版第１・２：筆者撮影。

引用・参考文献

青山　透編　1983 『酒屋高塚古墳』広島県教育委員会。

一瀬和夫　2004 「円筒埴輪」『弥生・古墳時代　埴輪』考古資料大観第４巻，小学館，249 ～ 256 頁。

岩井重道編　1998 『浅谷山東Ｂ地点遺跡・清水３号遺跡』広島県埋蔵文化財調査センター。

莵原仁美編　2004 『野稲南第８～ 11 号古墳』三次市教育委員会。

川西宏幸　1978 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第 64 巻第２号，日本考古学会，１～ 70 頁。

桑田俊明　1991a 「備後」『前方後円墳集成　中国・四国編』山川出版社，82 ～ 88 頁。

桑田俊明　1991b 「陽日南２号墳」『前方後円墳集成　中国・四国編』山川出版社，354 頁。

桑田俊明編　1983 『緑岩古墳』広島県教育委員会。

桑原隆博ほか　1983 『三玉大塚』広島県双三郡吉舎町教育委員会。

後藤研一　2018 「戦後広島県考古学の出発」『芸備』第 50 集，芸備友の会，190 ～ 200 頁。

島崎　東　1992 「中・四国」『古墳Ⅲ　埴輪』古墳時代の研究第９巻，雄山閣，68 ～ 81 頁。

妹尾周三　1992 「江の川流域の古墳　その１－酒屋高塚古墳の検討－」『芸備』第 22 集，芸備友の会，１～ 28 頁。

田辺昭三　1981 『須恵器大成』角川書店。

手島智幸　2012 「山陽西部における後期円筒埴輪の様相」『後期埴輪の特質とその地域的展開』中国四国前方後円墳研究会第 15 回研究集会（倉敷大会）実行委員会，33 ～ 44 頁。

中村　浩　1981 『和泉陶邑窯の研究』柏書房。

中村　浩　2001 『和泉陶邑窯出土須恵器の型式編年』芙蓉書房出版。

野崎貴博　1999 「埴輪製作技法の伝播とその背景」『考古学研究』第 46 巻第１号，考古学研究会，33 ～ 51 頁。

廣瀬　覚　2011 「埴輪の編年　①西日本の円筒埴輪」『古墳時代史の枠組み』古墳時代の考古学１，同成社，173 ～ 186 頁。

双三郡・三次市史刊行会　1956 『広島県双三郡・三次市史料総覧』第一篇，双三郡・三次市史刊行会。

古瀬清秀　1992 「古墳時代における備後北部の特質－特に三次盆地を中心に－」『吉備の考古学的研究』（下），山陽新聞社，183 ～ 206 頁。

宮崎泰史・藤永正明編　2006 『年代のものさし－陶邑の須恵器－』大阪府立近つ飛鳥博物館。

向田裕始編　1980 『下山遺跡群発掘調査報告』広島県教育委員会・広島県埋蔵文化財調査センター。

村田　晋　2018 『霧に包まれた古墳の謎－大王の時代と三次盆地－』広島県立歴史民俗資料館。

山田邦和　2011 「須恵器の編年　①西日本」『古墳時代史の枠組み』古墳時代の考古学１，同成社，146 ～ 159 頁。

山田俊輔　2011 「山陽地域における古墳時代中期の埴輪」『埴輪から見た中期古墳の展開』中国四国前方後円墳研究会第 14 回研究集会（鳥取大会）実行委員会，20 ～ 29 頁。

（むらた　すすむ　当館学芸員）

陽日南古墳群　円筒埴輪１

円筒埴輪１　下方へ向かう外面縦ハケ（１）

円筒埴輪１　下方へ向かう外面縦ハケ（２）

円筒埴輪１　斜め下方へ向かう内面ナデ

円筒埴輪１　底面粘土紐の継ぎ目

陽日南古墳群　円筒埴輪２

円筒埴輪２　外面横ハケ（１）

円筒埴輪２　外面横ハケ（２）

円筒埴輪２　上位突帯と粘土外傾接合痕

円筒埴輪２　下位突帯